令和４年度
初等中等教職員
国際交流事業
実施報告書

2022-2023
International Exchange Programme
for Primary and Secondary School Teachers
Programme Report

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託　令和４年度
新時代の教育のための国際協働プログラム
2022-2023 International Coordination Programme for Education
in a New Age entrusted by the Ministry of Education, Culture, Sports,
Science and Technology of Japan (MEXT)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。
ACCUはアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、2001年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。本事業は、ユネスコや国際連合大学（UNU）の事業として実施され、2018年度からは文部科学省の事業として引き継がれ、20 年以上途切れることなく続いています。本事業における日本のパートナー国は、2001年から韓国、2002年から中国、2015年からタイ、2016年からはインドが加わり、現在4ヶ国と連携、東アジアから東南アジア、南アジアに交流国を広げています。開始当初より2023 年現在までに、海外教職員は4ヶ国あわせて4,300人以上、日本教職員は1,200人以上が教育現場を舞台に相互理解と友好の増進に貢献してまいりました。
新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から、2022年度もオンラインを中心に国際交流推進のためプログラムを実施しました。オンライン交流は3年目となり、参加者が交流に積極的に関われるよう、オンライン上の体験を充実させながら、「多様な子どもが参加することができるインクルーシブ（包括的）な学校づくりを行うために必要なこと」や「わたしのESD」といったテーマを掲げ、海外と日本の先生が対話を通して交流を深めることに力をいれました。また、文部科学省による日本の初等中等教育の概況を踏まえ、海外の先生には日本のオンライン学校訪問をしていただき、日本の教育について、政策と現場の両面に触れる機会もこれまで同様に設けています。
海外渡航が叶わない数年を経て、海外の人々と触れ合うこと、国際交流すること、「出会う」ことの意義をあらためて問い直すことになりました。ACCUの「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」をこれからどのように展開していくのか。先のことを明確に見通すことが難しく、変化を肌で感じる社会情勢の中においても、課題を見据えながら、より魅力的な国際交流の機会を創り出していくため、今後も各国のカウンターパートや国内外の多様な「先生」と協働しながら取り組んでまいります。
最後に、本事業の実施にあたり多大なるご支援とご協力をいただきました関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

2023年3月
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

1　はじめに

3　令和4年度参加者の多様性（地域と校種）
事業概要、実績（およそ20年間の参加者数）

6　第１章　韓国との交流
7　１．ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム
10　２．韓国教職員招へいプログラム

14　第２章　中国との交流
15　１．中国教職員招へいプログラム（中国とのオンライン交流）

18　第３章　タイとの交流
19　１．タイ政府日本教職員招へいプログラム
22　２．タイ教職員招へいプログラム

26　第４章　インドとの交流
27　１．インド教職員招へいプログラム

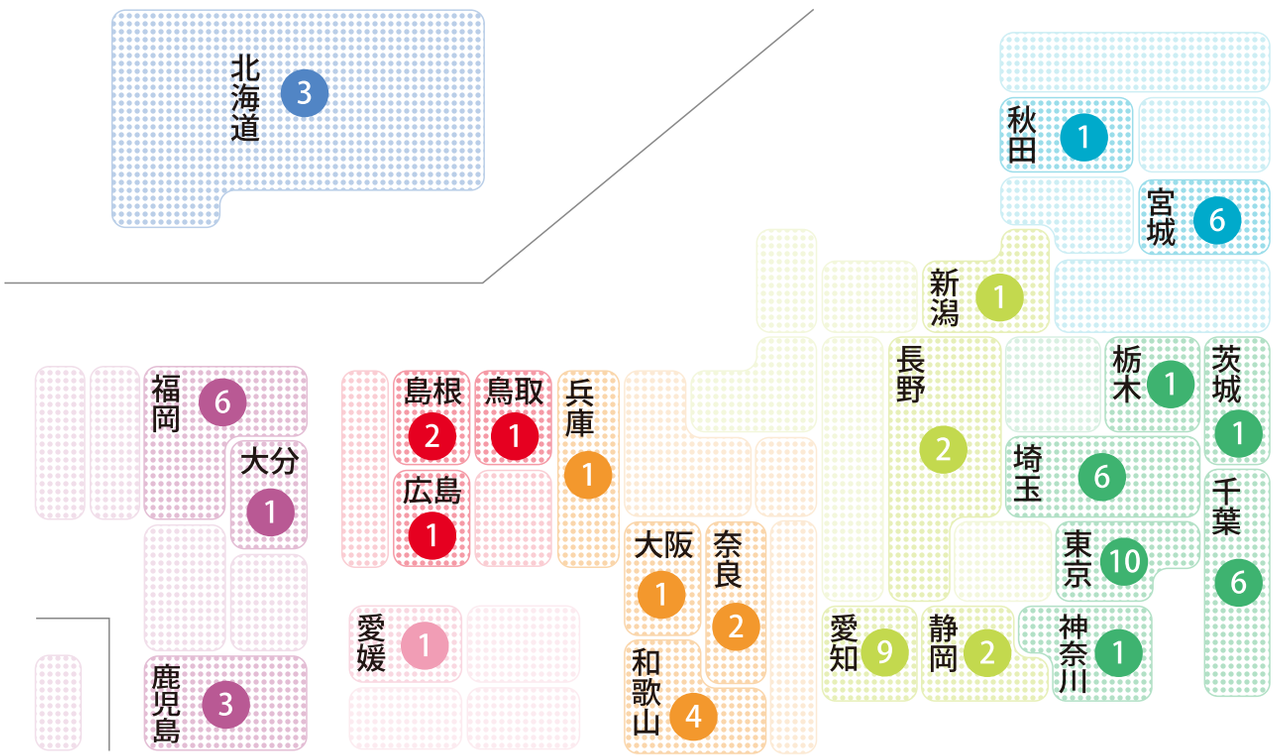
31　付録
プログラム写真

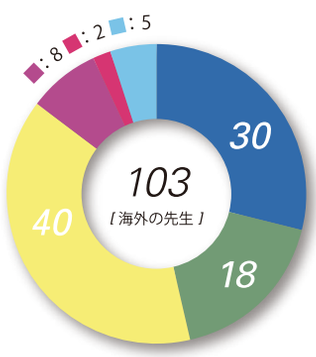
33　令和4年度プログラム協力機関（協力者含む）
プログラム関連機関
事業実施運営機関

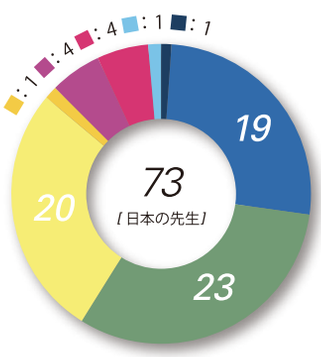
令和４年度参加者の多様性（地域と校種）

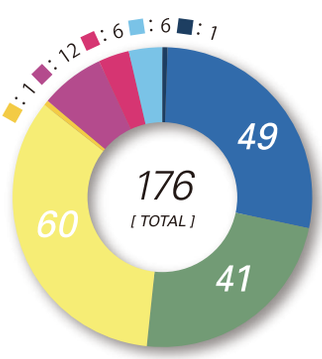
ACCUは「地方にいても、地方からでも」国際交流の機会を享受できること、参加者の属性を限定しすぎないことを大切にしています。今年度は派遣プログラムに参加した日本教職員は32名、招へいプログラムに参加した海外教職員は104名、招へいプログラムの交流に参加した日本教職員は41名でした。このページでは、令和4年度において4つの交流国（韓国、中国、タイ、インド）および日本のさまざまな地域や校種から本プログラムに参加した先生の多様な分布を地図やグラフで示しています。

地域別参加人数一覧





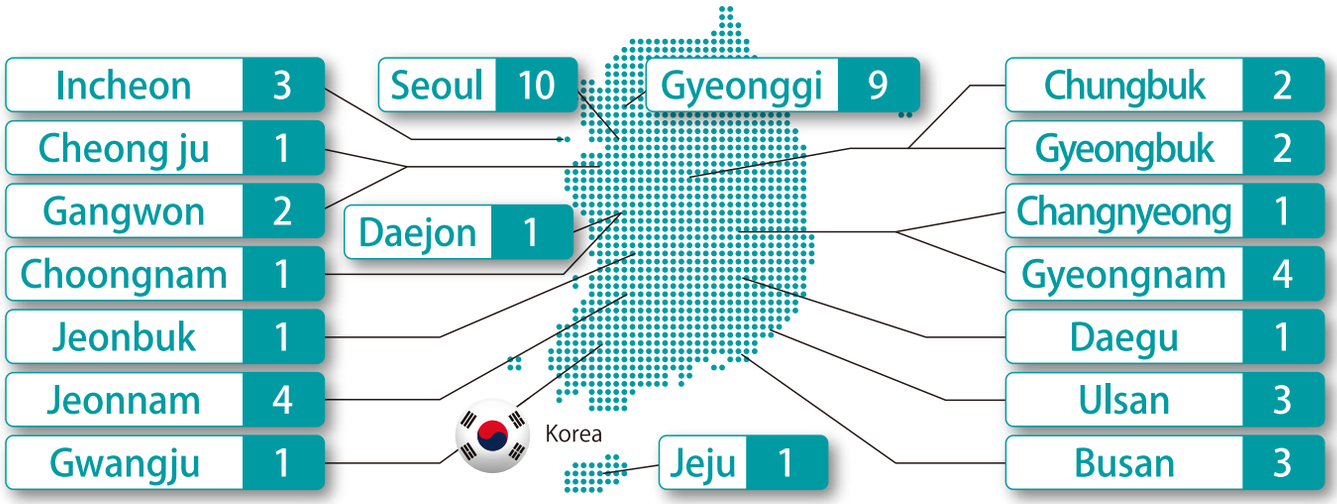


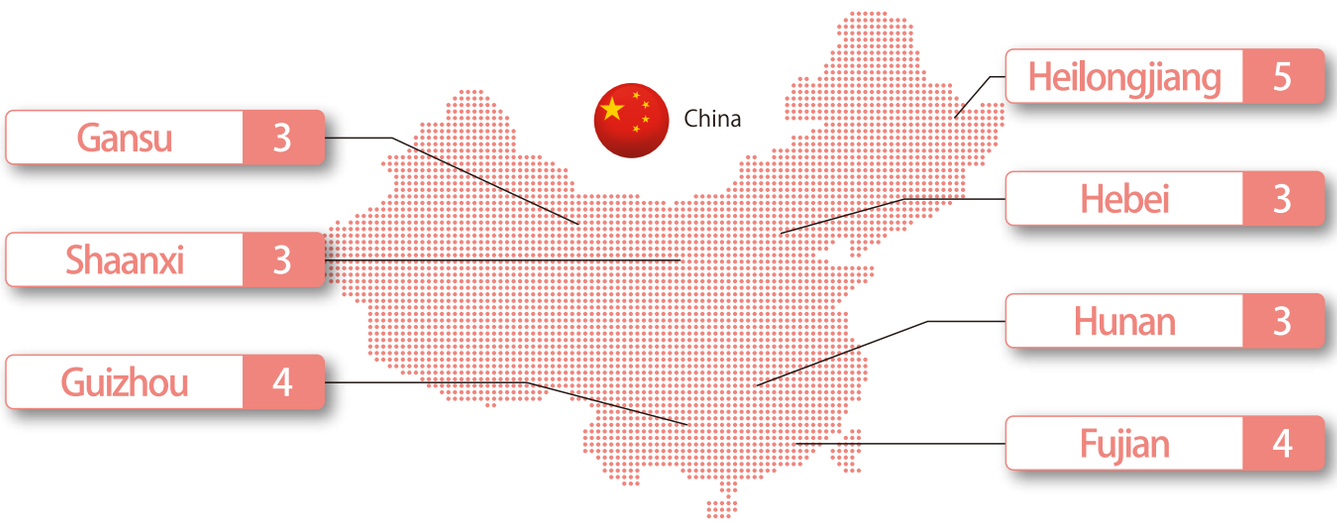


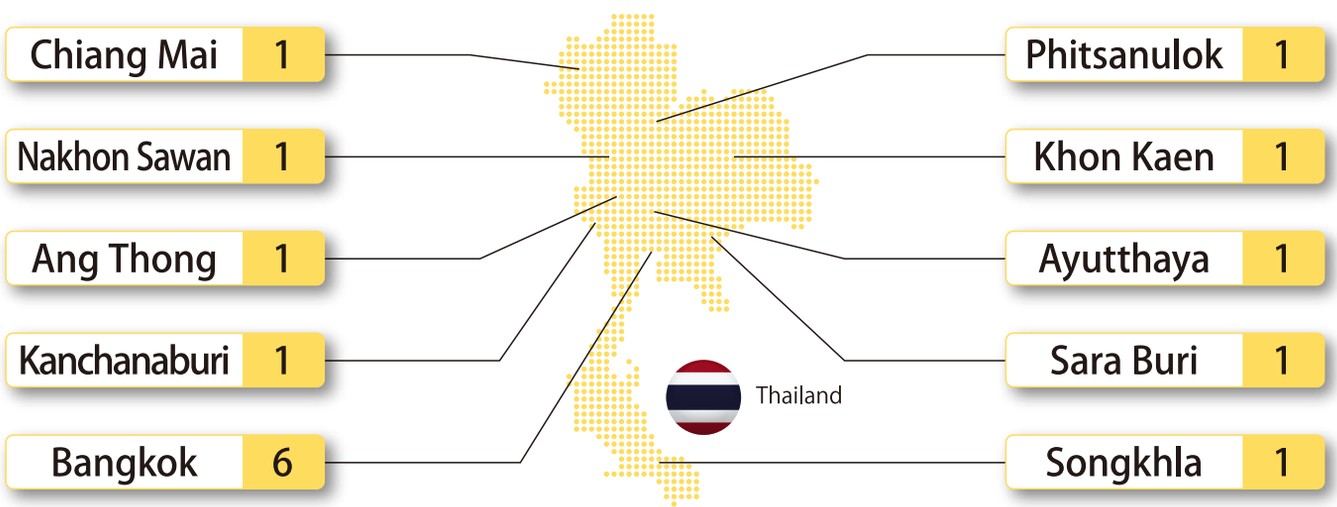
- その他
- 特別支援学校
- 中高一貫校
- 高校（専門学科）
- 高校
- 中学校
- 小学校
- 幼少中一貫

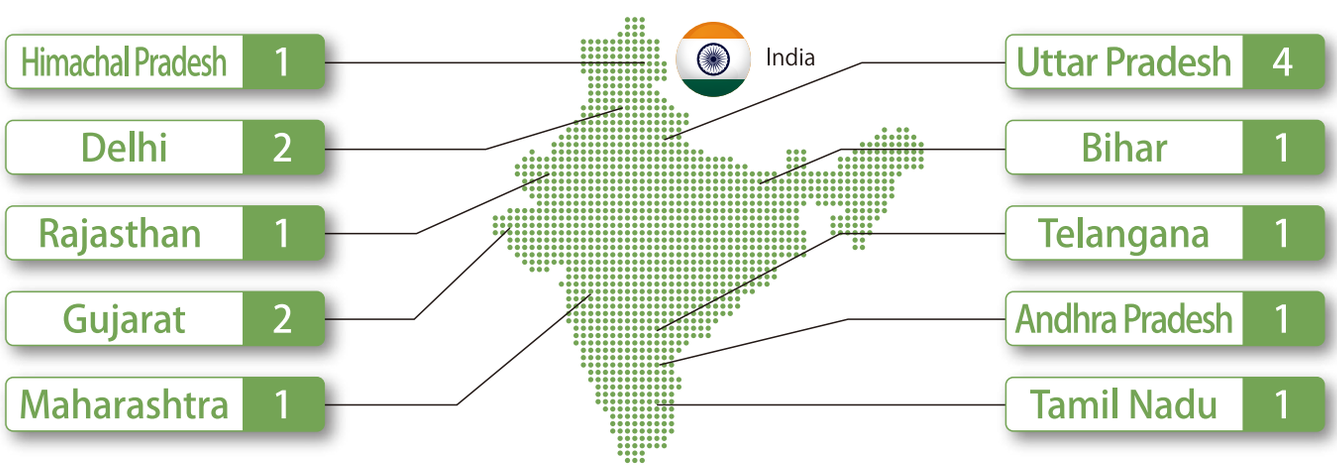
※ 校種不明の先生を除く

		幼少中一貫	小学校	中学校	高校	高校（専門学科）	中高一貫校	特別支援学校	その他
招へい	韓国（韓国の先生）	–	12	8	25	–	–	–	4
	中国（中国の先生）	–	11	7	5	–	–	2	–
	中国（日本の先生）	–	6	4	3	–	2	1	–
	タイ（タイの先生）	–	5	–	–	–	8	–	–
	タイ（日本の先生）	–	4	1	5	–	–	–	–
	インド（インドの先生）	–	2	3	10	–	–	–	–
	インド（日本の先生）	–	2	7	2	1	1	2	–
	合計	0	42	30	50	1	11	5	4
派遣	韓国（日本の先生）	–	3	8	6	–	–	–	–
	タイ（日本の先生）	1	4	3	4	–	1	1	1
	合計	1	7	11	10	0	1	1	1


Incheon 3
Cheong ju 1
Gangwon 2
Choongnam 1
Jeonbuk 1
Jeonnam 4
Gwangju 1
Seoul 10
Daejon 1
Gyeonggi 9
Korea
Jeju 1
Chungbuk 2
Gyeongbuk 2
Changnyeong 1
Gyeongnam 4
Daegu 1
Ulsan 3
Busan 3


Gansu 3
Shaanxi 3
Guizhou 4
China
Heilongjiang 5
Hebei 3
Hunan 3
Fujian 4


Chiang Mai 1
Nakhon Sawan 1
Ang Thong 1
Kanchanaburi 1
Bangkok 6
Thailand
Phitsanulok 1
Khon Kaen 1
Ayutthaya 1
Sara Buri 1
Songkhla 1


Himachal Pradesh 1
Delhi 2
Rajasthan 1
Gujarat 2
Maharashtra 1
India
Uttar Pradesh 4
Bihar 1
Telangana 1
Andhra Pradesh 1
Tamil Nadu 1

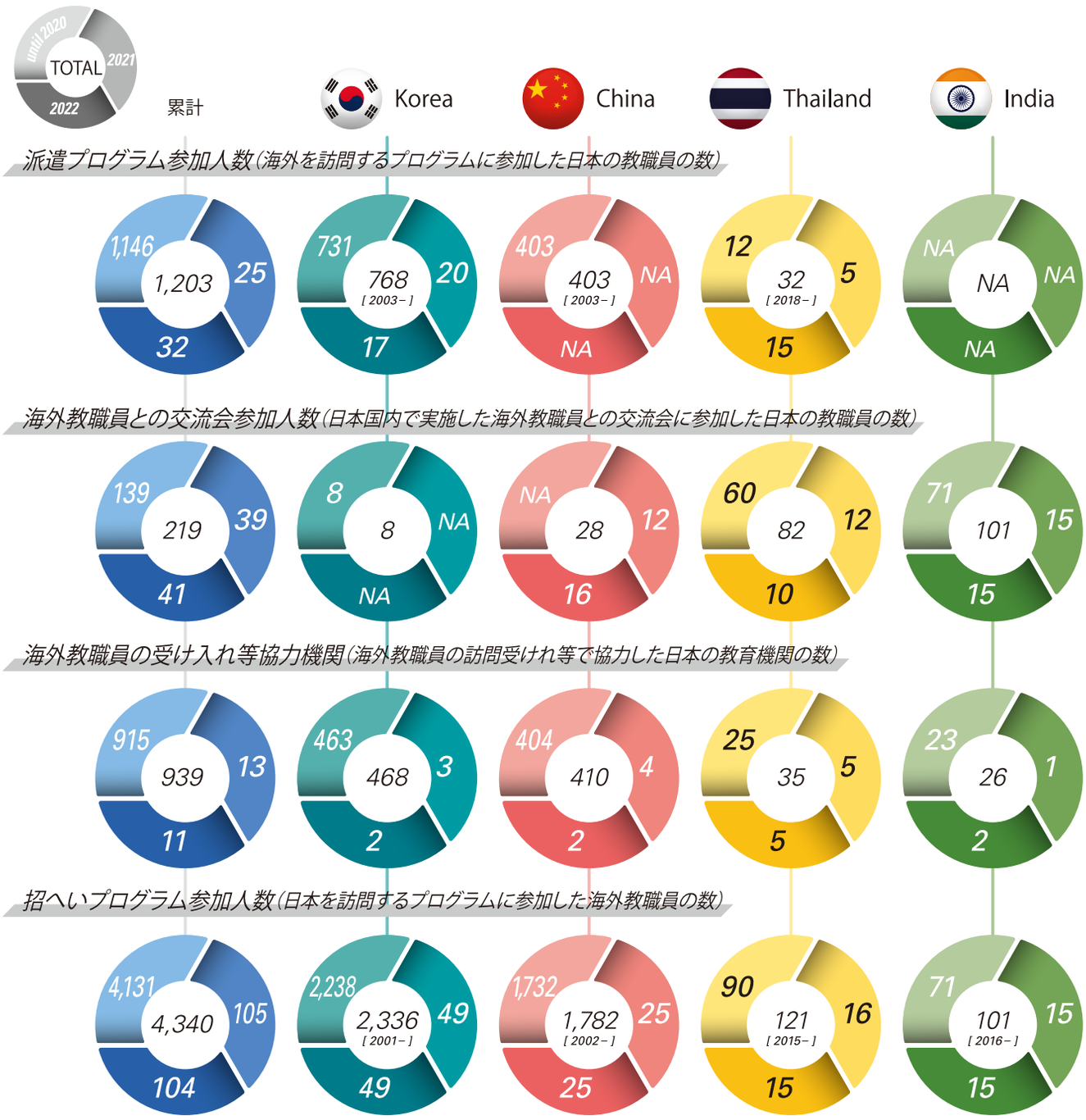
事業概要

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCUは2001年より、未来を担う子ども達に対する発信力や影響力を持つ教職員を対象とした国際交流事業を実施しています。令和4年度は文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」の一環として「初等中等教職員国際交流事業」を実施しました。

本事業では、教職員の国際的な対話を通じた学びの場づくりを軸に、教育現場での国際交流活動の活性化および国際理解推進を目的としています。プログラムにおける教職員同士の交流を通して、お互いの国の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が変容していく端緒を開き、ひいては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指しています。

事業実績



第１章

韓国との交流

Korea

韓国政府日本教職員招へいプログラム（ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム）

―― ポストコロナ時代、持続可能な未来のための児童生徒・教職員間の国境を越えたコラボレーション ――

背景

日本と韓国の間の国際交流事業に関しては、文部科学省の協力のもとで、韓国から教職員を招へいする「韓国教職員招へいプログラム」を2001年より実施し、日本教職員を韓国に派遣するプログラムを2003年より文部科学省および国際連合大学の協力のもとで実施してきました。これらの一連の事業は韓国政府に高く評価され、2005年からは韓国教育部の協力のもと韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）により「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム」が実施されています。これらの事業により、これまでに合わせて3千人以上の日韓の教職員が海を渡り、新型コロナウイルス感染症拡大以降も、オンライン上での交流を継続してきました。今年度のプログラムは、韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）の招へいにより、文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム　初等中等教職員国際交流事業」の一環で実施されました。

目的

1）日本の参加者が大韓民国の初等、中等、特別支援教育の制度や課題について理解を深めること
2）日韓の児童生徒が取り組む協働プロジェクトを取り入れた持続可能な開発目標（SDGs）の実践に関するブレンド型学習を共同開発し、ユネスコスクールを含む学校現場及び地域における持続可能な開発のための教育（ESD）や地球市民教育（GCED）の効果的な実践を探ること
3）指導経験を共有することで、両国の指導の質を向上させること
4）日韓の教職員及び児童生徒間のネットワークを強化すること

活動内容

オンラインプラットフォームを通じたウェブ会議、チャット、ウェビナーを活用して、下記の活動を実施しました。
1）現在の韓国の教育政策、ユネスコスクールや平和、持続可能な開発に関する事柄を含む課題を学ぶこと
2）COIVD-19の状況を踏まえて、地域コミュニティにおけるSDGsの実践に関するブレンド型学習を開発するために議論すること
3）持続可能な地域を創造するために、（特にパンデミック下における）学校や地域コミュニティにおいて、地球市民性や平和についてどのように学校で教えられるべきか探究すること
4）オンライン教職員交流や小グループでのディスカッションを通して韓国の教育制度における韓国の文化的特徴を見出すこと
5）オンラインフォーラムを活用し、SDGsの実践、地球市民性や平和の価値、COVID-19によりもたらされた困難を克服する方法をユネスコスクールのネットワークの中で共有すること

活動の例

授業モデルの開発（ブレンド型学習）

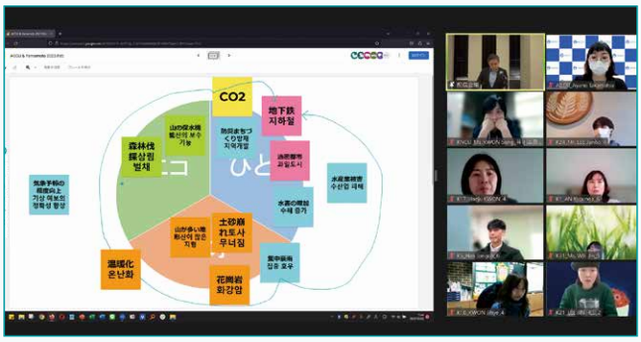
・議論（例：Havrutaアプローチを使用する）、問題解決型学習、プロジェクト型学習、バーチャル体験、オンライン協働など
・参加者は自由に協働授業のコンセプトを開発する。ただし、オンライン授業の結果として、日韓の児童生徒間で学びを実践する協働プロジェクトの実施を含むこと

テーマ

［ユネスコスクールの3つの行動分野に焦点をあてた持続可能な開発目標］
・地球市民と平和と非暴力の文化
- SDG 4.7（地球市民教育）、SDG 16（平和、正義、包摂的な社会）
・持続可能な開発と持続可能なライフスタイル
- SDG 13（気候変動対策）、SDG 15（陸の豊かさ）
・異文化学習、文化的多様性と文化遺産への正しい認識
- SDG 4.7（文化的多様性）、SDG 11.4.（世界遺産）

成果

・学校や地域コミュニティにおけるSDGsの実践に関するブレンド型学習の共同開発
- 手法：Google classroom、YouTube、Zoom等
・日韓の児童生徒に対するオンライン授業の実施
・オンライン授業の結果として、SDGsの実践にまつわる日韓の児童生徒による協働プロジェクトの実施
・プログラム終了後の持続可能な国際交流のための教職員・児童生徒間のネットワーク強化



日程

日程 / 期間	活動
7月16日（土）	・開会式、講義、オリエンテーション
7月～9月	・グループ間での議論とワークショップ（オンライン：複数回） ・中間報告会（8月27日（土）） ※日本側は東京にて対面会合 ・両国でのオンライン授業の実施
10月15日（土）	閉会式、報告会

参加者数

・日本の初等中等教育機関6校／一校につき2～3名の教職員

・協働授業及び関連する活動については、所属する学校において担当するクラス／部活動／その他のグループから最大20名までの児童生徒が参加

参加資格

1）日本の初等中等学校または特別支援学校の教職員であること

2）自らの教授経験を韓国の教職員と共有する強い意思があること。韓国のユネスコスクールとの継続的な国際交流を開始または継続したいという意思のある学校が望ましい

3）全てのプログラム活動に参加できる健康状態であること

4）ESDやGCED、ユネスコスクール活動に積極的に関与すること

通訳

公式日程の間は日本語－韓国語の通訳が手配される

参加者リスト

	氏名	所属先	担当教科
1	寺阪 多江	和歌山県古佐田丘中学校	管理職（教頭）
2	小西 壱幸	和歌山県古佐田丘中学校	英語
3	藪内 優子	和歌山県古佐田丘中学校	英語
4	小川 亮	北九州市立菅生中学校	社会、特別支援教育
5	星加 浩平	北九州市立菅生中学校	保健体育、特別支援教育
6	窪田 隆宏	北九州市立菅生中学校	保健体育、特別支援教育
7	村瀬 隆	鹿児島県立鹿屋高校	保健体育
8	藤原 奈緒美	鹿児島県立鹿屋高校	保健体育
9	原口 夏菜	鹿児島県立鹿屋高校	英語
10	鈴木 未央子	八千代市立大和田南小学校	全科目
11	中野 彩華	八千代市立大和田南小学校	全科目
12	玉井 智也	八千代市立大和田南小学校	全科目
13	坂本 交司	奈良教育大学附属中学校	英語
14	中村 基一	奈良教育大学附属中学校	社会
15	高橋 晋一	埼玉県立越谷北高等学校	英語
16	竹内 悟	埼玉県立越谷北高等学校	公民
17	荒木 美瑛	埼玉県立越谷北高等学校	英語

実施内容

令和4年度の「韓国政府日本教職員招へいプログラム」は「ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム―ポストコロナ時代、持続可能な未来のための児童生徒・教職員間の国境を越えたコラボレーション―」と題し、日韓の教職員がグループごとに共同授業を作り上げ、それを両国の児童・生徒に提供するという内容で実施されました。日本側では小学校1校、中学校3校、高等学校2校の計6校から17名の教職員が参加しました。

主催の韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）からあらかじめ示された3つのテーマ（SDGsの目標のうち、ユネスコスクールの3つの行動分野に焦点をあてて選定されたもの）が各グループに割り当てられ、そのテーマに沿った授業を行うことが求められました。

プログラムは7月16日の開会式に始まり、10月15日の最終報告会を行うまでに4回のグループ会議（共同授業の準備および実施後のリフレクション）と1～2回の共同授業を実施するという密度の濃いものでした。自己紹介・学校紹介から始まり、互いの教育活動やテーマに関連する課題意識の共有、共同授業のアイデアを出し合って実際に作り上げるまで、参加者はすり合わせのプロセスをねばり強く繰り返していきました。

また従前の「派遣プログラム」では、一緒に相手国を訪問する自国の参加者同士のネットワークが非常に大きな意義を持っていました。コロナ前も現在も、地域・校種・専門性・経験値など、様々なバックグラウンドを持った教職員がプログラムに参加していますが、オンラインプログラムを実施するなかで自国の参加者同士が知り合う機会が減少してしまうという状況も起こっていました。本プログラムでは、日本側独自の取り組みとして8月27日（土）に開催された中間報告会を都内の会議室から一斉に参加できるようにし、希望者を対象とした対面会合の機会といたしました。長い時間ではありませんでしたが、他校からの参加者と直接顔を合わせ、お互いのグループの交流状況を共有しあうことができました。

今回のプログラムは学校単位での応募を基本としていました。日韓を含む国際交流の経験が豊富な先生が他の先生を誘って一緒に応募するというグループも多く、校内での広がりができた学校もある一方、仲間を見つけることが難しい状況にある先生にとっては応募自体のハードルが上がってしまうという課題もありました。今後も様々な

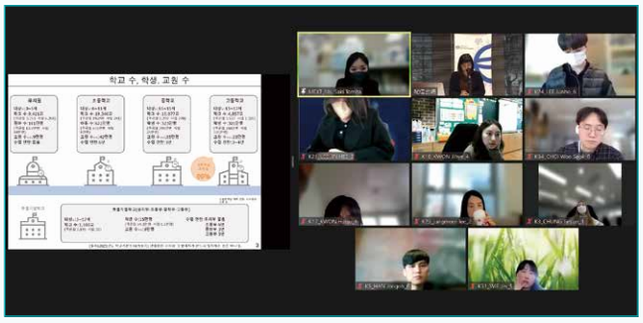
環境があることを考慮し、より多くの人にとって参加しやすいプログラムを日韓双方で検討していくことが必要です。

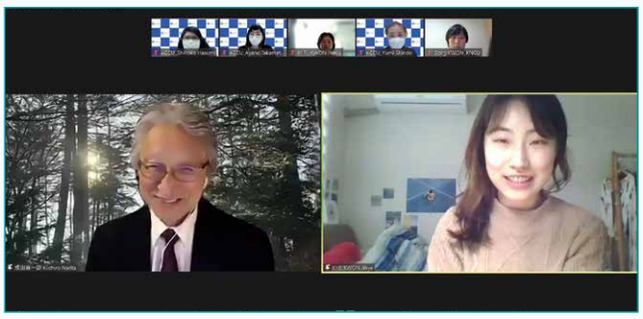
参加者の声

・教師にとっても生徒にとっても非常に良かったと考えています。元々、海外の様々な国とつながりを作っていきたいと考えていたところに、ハード面でもソフト面でもサポートをして頂きながら新しい繋がりを作り出せる機会を頂きました。非常に感謝しております。

・尊敬できる韓国の先生方と出会い、またあらゆる面でハイレベルな韓国の生徒達と出会い、あのような先生方と並んで仕事のできる教師になりたい、あのような素晴らしい生徒達と自信を持ってコミュニケーションを取れる生徒達にしてあげたいと思いました。

・韓国の生徒の皆さんが、日本語での発表を準備してくださったことに「相手を思いやる優しさを感じた」と感想を述べる生徒がおり、国境を越えて「相互理解」の大切さを学ぶことができました。





韓国教職員招へいプログラム

背景

22回目を迎える今回のプログラムでは、韓国教職員49名を招へいしました。49名のうち37名はオンラインプログラムに、12名は対面プログラムに参加しました。またオンラインプログラムでは、新しい試みとして、全員が参加する必須プログラムに加えて、複数の活動の中から参加者自身の経験値や興味・関心に合致するものを選ぶ選択プログラム型を採用しました。

オンライン・対面の二つの形態がありますが、これは両者が断絶されていることを意味しません。双方でユネスコのプログラムであるジオパークとの協働を予定しているほか、プログラム全体を貫くコンセプトとして参加者それぞれの「問い直し」と「内省」を重視しています。交流や対話の活動を通して自らを振り返ること、体験を自分の文脈に引き寄せて捉えることをプログラム期間中に繰り返しながら、プログラムに参加した経験を各自の環境で生かしていく糸口を探りました。

目的

本プログラムの目的は、日韓教職員が互いの教育制度、教育事情および文化について相互理解を深めるとともに、多様性への理解と尊重を育むことです。そして、その学びを参加者が自身の教育活動を通して次世代に伝えることで、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現につなげることを目指します。

活動内容

オンラインプログラムについては、ウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行いました。

(1) 日本の教育制度についての講義受講
(2) 学校訪問（教職員および児童・生徒との交流を含む）
(3) 日本の教職員との意見交換や対話
(4) 文化体験
(5) ワークショップ
(6) 振り返りセッション

参加者のうち13名は、東京都および静岡県で対面開催されるプログラムに参加しました。

日程

本プログラムは、＜対面＞と＜オンライン＞の2種類があります。対面プログラムは意見交換を中心とした内容で、オンラインプログラムは、全員が参加する全体プログラム（動画の視聴、開会式/オリエンテーション、ジオパークワークショップ、リフレクション/閉会式）と選択プログラム（学校訪問、文化体験など）を組み合わせて実施されました。

● 対面プログラム

プログラム	実施予定	内容
来日プログラム	2023年1月10日～15日（5泊6日）	・オンライン交流の成果共有・意見交換 ・静岡県内のジオサイトおよび関係機関への訪問、教育関係者との交流

● オンラインプログラム

プログラム	実施予定	内容
開会式・オリエンテーション	1月27日（金）午後	・開会式 ・日本の教育制度に関する講義 ・プログラムオリエンテーション
ジオパークのプログラム	2月2日（木）	・ジオパークと教育現場の連携に関するワークショップ
選択プログラム①～④	1月下旬～2月上旬	・学校訪問、ワークショップ
リフレクション・閉会式	2月10日（金）午後	・プログラムの振り返りセッション ・閉会式

参加者数

韓国教職員50名（韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）並びに韓国教育部の職員を含む）

	教職員・教育行政職員	KNCU職員	合計人数
対面	10名	3名	13名※
オンライン	37名	オブザーバーのみ	37名
	47名	3名	50名

※ うち教職員１名は体調不良のため参加キャンセル

参加資格

● 対面・オンライン 共通

(1) 国際理解教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGs（持続可能な開発目標）等に高い関心を持つ者。
(2) プログラム参加中に得た成果をプログラム後に自身の所属先、延いては韓国の教育に還元する姿勢を持つ者。
(3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日本との交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つ者。
(4) 大韓民国の国籍を有すること。
(5) 所属する学校等からの推薦を受けた、韓国の初等中等教育に携わる教職員および教育行政職員であること。（教

育行政官及び教育専門家を含む）
(6) プログラムの全日程に参加が可能であること。

● 対面プログラムのみ
(1) 2020年から2022年の間にオンラインで実施された日韓交流プログラム（日本側・韓国側いずれの主催するものでも可）に積極的に参与した経緯があること。
(2) 有効な旅券を保有し、参加決定後に速やかに提出できること。また、プログラム前に必ず海外旅行保険に加入すること。
(3) 日本の厚生労働省が定める、新型コロナウイルス感染症における日本入国時の検疫手続きに応じられること（2022年10月時点の条件はワクチン3回接種の証明書あるいは現地出国前72時間以内に採取した検体の陰性である検査証明書の提出、質問票への回答）。

● オンラインプログラムのみ
過去の日韓教職員交流プログラムに参加した経験のある教職員の参加も可とする

評価と報告

プログラム終了後
(1) 各参加者はACCUのオンライン評価票に回答した。
(2) 各受入機関はオンラインアンケートに記入し送信した。

通訳

ACCUはプログラム期間中、逐次通訳（日ー韓）が手配された。

参加者リスト

対面プログラム

	氏名	所属先	担当教科
1	HAN Kyung Koo	Korean National Commission for UNESCO (KNCU)	–
2	CHO Eun Kyeong	Jeonju Geun-Young Middle School	History
3	–	–	–
4	HAN Sangjoon	Jin-Gyeong Girls Highschhol	Education
5	HAN So Young	Puhung High School	World Geography, Travel Geography
6	KIM Ji Young	Eonyang highschool	Korean
7	PARK Chansoo	Saemmaru Elementary School	All subjects
8	PARK Junesung	HapcheonGaya Elementary School	All subjects
9	SHIN Junghoon	Changnyeong Daeseong High School	History
10	YEOM Sookyung	Attached Elementary School of Gwangju Education University	English
11	YOON Jieun	Taejeon High School	English
12	SHIN Jong Beom	Korean National Commission for UNESCO (KNCU)	–
13	SOH Ki Joon	Korean National Commission for UNESCO (KNCU)	–

オンラインプログラム

	氏名	所属先	担当教科
1	AN Kyounga	Incheon Cheonryang Elementary School	History
2	CHOI Somang	Okgwa High School	Social studies (politics and law, economics, social culture)
3	CHUNG Jinsun	Seoul Global High School	Social studies (politics and law)
4	EUM Dayeong	Bucheon Ilsin Middle School	Social studies (geography)
5	HAN Jongoh	Eonyang highschool	English
6	JEON Hye-In	Munsan Su-Eok High School	Geography, politics and law, combined social studies
7	JEON Yerin	Saemmaru Elementary School	Elementary
8	JUNG Gun Woo	San Ja Yeon Middle School	Information/ computer
9	JUNG Yurina	Damyang Middle School	English
10	KIM Hyunhee	Jeonnam Foreign Language High School	English
11	KIM Hyunsook	Janggok High School	English
12	KIM Kildong	Poongmoon High School	English
13	KIM Kyoung Hwan	Peniel Middle School Of The Arts	English
14	KIM Seungchul	Shinheung High School	English
15	KIM Yiseul	Incheon Foreign Language High School	Korean
16	KOH Sounohk	Samsung Girls' High School	Social curriculum, life and ethics
17	KWON Haeju	Soha High School	Economics, global problems and future society

	氏名	所属先	担当教科
18	KWON Jihye	Seoul Konghang Elementary School	Elementary
19	LEE Jae-Won	Seonhwa Girls' Middle School	English
20	LEE Jihyeon	Taereung High School	Geography
21	LEE Jinhee	Chungnam Girls' High School	Music
22	LEE Jongmyung	Hapcheongaya Elementary School	Elementary
23	LEE Jungmeen	Seoul Daelim Elementary School	Elementary
24	LEE Junho	Incheon Dangsan Elementary School	Elementary
25	LEE Mira	Daegu Seobu High School	English
26	LEE Misuk	Taejeon High School	Japanese
27	LEE Seung Min	Yeosu Jungang Girls' High School	English
28	LIM Hee Jung	Suwon Songlim Elementary School	Elementary
29	RYU Dong Gu	Gyenggi Management High School	Japanese
30	SEO Kang Dyuk	Jin Ryang High School	History
31	WIE Jin	Yumkwang Middle School	English
32	KANG Jiyoon	Samjuk Elementary School	English, Science
33	CHOI Sung-Woo	Bae Jeong High School	English
34	CHOI Woo Seok	Cheong Ju-Shin Heung Highschool	English
35	SHIN Junghoon	Changnyeong Daeseong High School	History
36	PARK Junesung	Hapcheongaya Elementary School	All subjects
37	KWON Song	Korean National Commission for UNESCO	

実施内容

本年度の韓国教職員招へいプログラムは、完全なオンライン形式から対面形式の復活に向けた移行段階のプログラムとして企画を行いました。過去に実施してきたオンラインプログラムの成果を共有しながらアフターコロナのプログラムについて意見交換を行うことを目的とした＜対面＞と、様々な種類の活動から自身の興味・関心にあったものを選べる＜オンライン＞の二つの形態で実施し、合計で49名（対面参加のキャンセル1名あり）の韓国教職員等が参加しました。

1月10日から15日の期間に先行して行われた対面プログラムでは、過去2年間でオンラインを通して日本の先生方との交流を経験した先生のみを対象とし、意見交換のセッションと地域訪問プログラム（静岡県三島市・神奈川県箱根町）を主とした活動を行いました。意見交換においては、3回にわたり実施された会議では、オンラインプログラムでの体験からはじまり、日本でのプログラムに参加する中での発見、アフターコロナにおけるプログラムへの展望を語り合いました。地域訪問プログラムにおいては、ユネスコのプログラムであるジオパークを実際に訪問し、地域の教育関係者から連携の事例を学ぶことでESDにふれ、互いの実践を共有する機会を持ちました。参加者を含めて、コロナの影響により直前で予定が変更になることもありましたが、期間中は参加者・関係者が体調を崩したり、感染が広がったりすることなく、無事に全日程を終了できました。今回は過去に実施していた形態の交流をそのまま戻すことは難しい状況でしたが、今後のステップとしては、健康と安全を確保したうえでの学校現場への直接訪問が期待されています。

1月27日から2月10日にかけては、オンラインプログラムを実施しました。全員が参加する全体プログラムと選択プログラムを組み合わせて実施しました。対面・オンラインの共通要素としては「ジオパークと教育現場の連携」を掲げ、全体プログラムにおいてワークショップを行いました。ジオパークのことを良く知らないという参加者も多かったものの、韓国でも気候変動に関する科目がカリキュラムに加わるという流れがある中で、今後の教育活動につながるアイデアを学ぶ機会となりました。選択プログラムのうち、これまでのオンラインプログラムでも実施してきたオンライン学校訪問では、リアルタイムで二つの学校とつながって教育実践の様子を見学し、児童・生徒や教職員との意見交換を行いました。また、韓国教職員招へいプログラムにおいては初めての試みとして、学校訪問・教職員交流会以外のワークショップを二つ取り入れました。韓国教職員招へいプログラムは参加人数が他プログラムと比べて多いことから、プログラム選択制を取り入れて各プログラムが少人数で実施できるように工夫しました。

韓国教職員招へいプログラムは、本事業で実施している四か国との交流プログラムのうち最も長い歴史を持っています。このパンデミック下においても、距離が近く時差がないことなどが味方となって、部分的な対面プログラムの復活という一足先の展開を迎えています。

本年度のプログラムにおける成果のうち少なくない部分が、対面・オンラインの二つの形式で実施をしたことによってもたらされたものです。対面だからこそ起こった化学変化、オンラインで生まれた新たな活動、オンラインだからこそ参加できる学校や教職員の存在など、運営機関はこれからパンデミックの状況に応じて形を変えていくプログラムを運営するにあたって重要な視点を獲得し、参加者もまた幅広いテーマや形式で学びを深め、交流する体験を提供できました。対面・オンラインのそれぞれに実りのある、そして教職員交流事業全体を踏まえても次への一歩となるプログラムとなりました。

参加者の声

〈 対面 〉

・対面でともに過ごすことによって、（一緒に日本を訪問する）韓国の他地域の先生たちからも、ノウハウを学ぶことが期待できます。

・（ジオパークを活用した教育実践について学び、訪問したことを受けて）自分の学校の子どもたちが周辺の自然環境を楽しむ姿を見たいと思いました。

・学校がユネスコスクールに加盟していても、教職員の異動などで活動をつないでいく困難を克服する方法を模索しています。このようなプログラムなどに参加した先生たちが「ユネスコ教師」になって、その先生が違う学校に移動したらそこがユネスコスクールになるという考えはどうでしょうか。

〈 オンライン 〉

・ユネスコで心を一つにし、日韓間の教職員が交流をするということに対する喜びと、中学校への訪問や茶道のワークショップなどが非常によかったです。

・このように彩り豊かなオンラインプログラムを行えるということに驚きました。プログラムの準備をしてくださった方や、学校訪問を受け入れてくださった学校や先生、児童・生徒のみなさんに感謝申し上げます。こんなに素敵なプログラムに参加することができて光栄です。

・小学校のオンライン訪問で直接コミュニケーションを取ってみて、難しく考えていた国際交流がそれほどハードルの高いものではないかもしれないということ、日本という国をさらに知ることができて良かったという気持ちになりました。

第 2 章

中国との交流

China

中国教職員招へいプログラム（中国とのオンライン交流）

背景

日本と中国の国際交流事業としては、2002年に中国から初等中等教育教職員を招へいし、プログラムが始まりました。2003年からは中国政府による日本教職員の訪中プログラムに発展し、今日にいたるまで相互交流が続けられ、併せて2千人以上の中日教職員が海を渡りました。
今年度は、昨年度に引き続きオンライン形式のプログラムを実施し、中国教職員が日本の教育について学び、日本に対する理解を深めるとともに、日本教職員と交流する機会をつくりました。今回のプログラムにおいては多様な背景を持つ児童生徒に対しての教育の重要性が増す中で「多様な子どもが参加することができるインクルーシブ（包括的）な学校づくりを行うために必要なこと」をテーマに様々な経験をもつ中国と日本の教職員が対話・協働し、相互理解を深めました。また日本の学校の魅力的な取組みを紹介し、教職員や児童生徒との交流を通じて日本に対する理解を深めていきました。さらには中国教職員のみならず、日本の参加者も交流により中国の教育について学ぶ機会を設け、双方の国際理解促進に寄与しました。

目的

・中国および日本教職員が双方の学校教育の現状を把握すること。
・中国および日本教職員が日本の学校の特色ある取り組み（教育実践）の好事例を学ぶこと。
・中国教職員と日本教職員が意見交換等を通じ交流すること。
・プログラムに関わる中日双方の関係者が友好を築き、相互理解の促進、ネットワークを構築すること。
・参加した教職員が各教育現場で国際理解または国際交流活動を推進していくこと。

活動内容

・日本の教育制度および教育政策についての研修（オンラインによる）
・日本の学校等の取組みに関する視察（オンラインによる）
・教職員や児童生徒との意見交換や交流（オンラインによる）
・教職員による両国の文化等の紹介（オンラインによる）

日程

日程（2022年）	Aグループ（中国教職員13名） 小学校との交流	Bグループ（中国教職員12名） 中学校・高等学校との交流
12月6日（火）	・開会（あいさつ） 文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室 室長　出口夏子 中国教育部 基礎教育局総合課 課長　張輝武 中国大使館 教育処 二等書記官　張瓊瓊 ACCU　国際教育交流部 部長　進藤由美 ・オリエンテーション ・日本の教育政策についての講義 文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課 国際企画調整室 専門職　冨田早紀 ・テーマに関してのワークショップ ・香川大学　坂井聡氏によるテーマに関しての話題提供	
12月8日（木）	ホライゾン学園仙台小学校へのオンライン学校訪問 ・児童との交流：日本の学校での生活・地元の街・文化などについて発表と質疑応答、探究型学習で現在取り組んでいる学習内容の発表と議論 ・教職員との交流・プログラムテーマについての議論	
12月11日（日）	全国各地より参加する日本の教職員とのプログラムテーマに関する交流・意見交換	
12月14日（水）		AICJ中学・高等学校へのオンライン学校訪問 生徒との交流：アイスブレイクと探求型学習で取り組んでいる学習内容の発表・議論 ・教職員との交流・プログラムテーマについての議論
12月21日（水）	報告会、閉会 ・中国教職員数名より振り返りと今後の展望を発表	

日程（2022年）	Aグループ（中国教職員13名） 小学校との交流	Bグループ（中国教職員12名） 中学校・高等学校との交流
12月21日（水）	・日本の協力校より振り返りと今後の展望を発表 ・漢字を使った振り返り ・香川大学　坂井聡氏による総括と今後の展望についての発表 ・閉会（あいさつ） 国際教育交流部 部長　進藤由美	
2023年1月5日（木）	閉会後、参加者は評価票を提出	

参加者数

中国教職員25名

・12月8日（木）と12月14日（水）のオンライン学校訪問の日程についてはAグループ13名（ホライゾン学園仙台小学校への訪問）とBグループ12名（AICJ中学・高等学校への訪問）に分かれて参加しました。

・両日以外の日程については25名全員が参加しました。

日本教職員16名

・全国から公募をした日本教職員16名が12月11日（日）の日程に参加しました。

・上記以外の日程にはオンライン訪問の受け入れ校の教職員が参加しました。

参加資格

【中国・日本側に共通する参加条件】

（1）初等中等教育に携わり、日本また中国との交流に意欲的な者

（2）プログラム後も中日の国際交流や国際理解推進に積極的に関わることができる者

（3）十分なインターネット環境があり、パソコンやWeb会議システム用アプリケーションの操作ができる者

（4）プログラムの全日程に参加が可能である者

【中国の参加者について】

（1）中華人民共和国の国籍を有する者

（2）中華人民共和国の初等中等教育の教職員である者（教育行政官及び教育専門家を含む）

【日本の参加者について】

日本の初等中等教育の教職員である者（教育行政官及び教育専門家を含む）

評価と報告

参加者はACCUの用意する評価票（アンケート票）に記入し、中国教育部または中国教育国際交流協会の担当者がとりまとめ、ACCUに提出した。

通訳

公式プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われた。

参加者リスト

中国の先生

	氏名	所属先	担当教科
1	尹英	哈爾浜市特殊教育学校	数学
2	殷娜	哈爾浜新区師範附属小学校	総合実践
3	孫蕾	哈爾浜市師範附属小学校	数学
4	張琳	廊坊市第十小学校	音楽
5	陳明潔	福州教育学院附属第四小学校	国語
6	李悠悠	厦門外国語学校附属小学校	英語
7	謝甜	長沙麓山国際実験小学校	英語
8	王雲霞	長沙市実験小学校	思想政治
9	許丹	六盤水市水城区第二小学校	英語
10	王楊	遵義市特殊教育学校	特殊教育「道徳と法治」
11	李晨	陝西省西安小学校	英語
12	柳維紅	甘粛省蘭州実験小学校	国語
13	李瑛	甘粛省蘭州市西固区福利東路第二小学校	英語
14	劉坤竜	哈爾浜市第一一三中等学校	英語
15	董秋蕾	哈爾浜市第一中等学校	日本語
16	劉鳳玲	廊坊市第七中等学校	国語
17	李春盛	廊坊市第三中等学校	数学
18	朱佳涵	福建省福州第十九中等学校	英語
19	王秋月	厦門外国語学校	日本語
20	高原	長沙市長郡双語実験中等学校	道徳と法治
21	劉穂	貴陽市第四十中等学校	国語
22	劉婷婷	貴州省興義一中	生物学
23	宋蓉	陝西省西安愛知中等学校	歴史学
24	景晶	陝西省西安中等学校	英語
25	朱瑾瑞	甘粛省蘭州第一中等学校	英語

日本の先生

	氏名	所属先	担当教科
1	福島 未希	AICJ中学・高等学校	理科
2	秋山 繁治	山脇学園高等学校	科学課題研究
3	寺島 栄一	茎崎高校	商業
4	熊井 戸有美	東京都立鹿本学園	小学校全科
5	熊澤 ほづみ	静岡聖光学院中学校・高等学校	国語
6	加藤 豊裕	一宮市立萩原小学校	外国語（英語）
7	黄山 泉	東京都府中市立浅間中学校	数学
8	堀 裕樹	小平市立小平第五小学校	全科

	氏名	所属先	担当教科
9	仲地 康成	愛西市立開治小学校	小学校全科（理科・音楽科・家庭科を除く）
10	堀田 明子	北海道幕別清陵高等学校	家庭・福祉
11	郡山 樹理	品川区立富士見台中学校	英語
12	福田 勇人	本庄市立本庄東小学校	算数
13	笹村 洋子	三種町立金岡小学校	小学校科目
14	井形 一愛	北海道寿都町立寿都中学校	国語(日本語)科、英語科
15	渡部 宏美	北海道苫小牧市立沼ノ端小学校	全教科
16	木村 俊介	春日井市立西部中学校	理科

実施内容

本年度のプログラムは「多様な子どもが参加できるインクルーシブ（包括的）な学校づくりを行うために必要なこと」をテーマにした教職員同士の対話を活動の中心に位置づけて5日間の日程で実施をしました。今回のテーマは日本と中国の両国共に多様なバックグラウンドをもつ子どもへの教育の重要性が増している社会状況が背景にあることを踏まえて決定しました。

まず初日に行われた開会式・オリエンテーションにおいては香川大学の坂井聡教授をお招きして多様性を受け入れる学校づくりに関して環境の構築という観点から話題提供を頂きました。参加者は上記の学校づくりを考えていくに当たっての非常に重要な示唆を得てその後の日程の交流に臨みました。具体的な交流は日本の学校へのオンライン学校訪問と交流会という形で実施をしました。オンライン学校訪問ではホライゾン学園仙台小学校とAICJ中学高等学校の児童生徒や教職員との交流を行い、日本の受け入れ校の多様な教育実践についての理解を深めると共に、教職員同士の交流を通じて多様な子どもと接する上での喜びや難しさ、インクルーシブな学校づくりを行う上での大切にしている価値観や実践についての意見交換を行いました。交流会には日本全国から個別で応募をした教職員との交流を通じてより多様な地域や学校の実践についての対話を行いました。また多様性がテーマにあることにちなんで参加者の馴染みのある地域に根付いた多様な文化について写真を用いて紹介を行うというセッションも行い、教育だけでなく両国の文化についても楽しみながら学び合いました。

最終日には再び坂井教授からのプログラムの総括があり、「このプログラムは交流を通じて両国の教職員が多様性を受け入れる学校づくりを今後行っていくための新しい扉を開く機会になった」とのコメントがありました。そして「すべての子どもが先生の愛する対象である」ことが改めて強調されて、参加者にとって今後の実践を行っていく上での大きな励みとなりました。

また今回のプログラムは「インクルーシブな学校づくり」というテーマを通じて、参加者は様々なバックグラウンドを持つ他者との対話を行い多様性の奥深さについての答えのない問いをじっくりと考えました。日頃の業務や生活を離れてこのような問いに向き合うことは参加者にとって改めて自分自身を振り返る機会となりました。

参加者の声

・教育実践や制度は両国では違うがインクルーシブな学校づくりに向けての熱意は両国の教員が共通して持っていることを改めて実感した。（中国側参加者）

・インクルーシブな学校づくりを行うに当たっての様々なヒントを得ることができて今後の実践に活かしていきたい。（中国側参加者）

・様々な社会的な状況は違えども教育者として日頃の現場において課題を抱えてその解決に奮闘している部分は同じであることを感じることができた（日本側参加者）

・これまで気が付かなかった日本社会に存在する多様性について改めて気づくことができて視野が広がったと同時に、自分自身についても改めて振り返る良い機会となった。（日本側参加者）

第3章

タイとの交流

Thailand

タイ政府日本教職員招へいプログラム（タイ派遣プログラム）

背景

初等中等教育にかかる日タイ間の交流事業は、2015年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年15名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018年から「タイ政府日本教職員招へいプログラム」が開始され、2019年度までに12名の日本教職員がタイを訪問しました。
2022年度は、タイ教育省およびチュラロンコン大学協力のもと、前年度に続いてオンライン形式で15名の教職員を対象にアートをテーマとしたワークショップ・プログラムが提供されました。

目的

(1) オンラインワークショップやアクティビティを通した意見交換を通じて、参加者がタイの教育で大切にされている知恵や導入事例についての知識を深めること。
(2) 参加者がタイの教育事情、とくにアートを通した教育についての理解を深めること。
(3) 参加者がプログラムを通して、将来的にタイと教育分野における協力を強化していく下地をつくること。

活動内容

「アートは世界の共通言語－タイの文化・芸術教育から学ぼう－」をテーマとした講義およびワークショップ

日時	プログラム内容
9月19日（月・祝）16:00-19:00	・プログラム開会式
	ワークショップ① テーマ：バーチャルミュージアムツアー＆日本とタイのアート・コラボレーション 講 師：Dr. Sarita Juaseekoon and Dr. Sirikoy Chutataweesawas 初日のワークショップでは、タイで最も古い博物館であるバンコク国立博物館をオンラインで訪れ、タイの文化が表現されたアートをともに鑑賞しました。参加者は、タイと日本の文化や環境に共通する価値観を学び、自然や仏教など、アートのインスピレーションとなるものを学び、後半では、ワークショップで学んだタイのアートの要素を使ったデザインに挑戦しました。
9月20日（火）16:00-18:00	**ワークショップ②** テーマ：子どもの発達のためのアート 講 師：Assistant Professor Apichart Pholprasert (Ph.D.) 二日目のワークショップでは、アートとそれが持つ価値を理解するための基礎的な内容を理解し、子どもの様々な能力の発達を促すことについて学びました。創造性や想像力を高めるというアートの特性に重点を置きつつ、アートが生涯を通じていかに多様な次元で人間の幸福を促進しうるのかを考えるとともに、リラックスした雰囲気の中で絵を描くアクティビティを通して、参加者が絵を描くことに自信を持ち、最終的には授業に絵を取り入れることができるようになることを目指しました。
9月23日（金・祝）16:00-18:00	**ワークショップ③** テーマ：タイの学校教育における伝統音楽および舞踊 講 師：Ph.D Vitchatalum Laovanich and Ms. Jutimaporn Paojinda 最終日は、タイの伝統音楽と舞踊を理解するための基礎と、子どもたちの様々なスキルの発達という側面から伝統音楽・舞踊を取り入れる価値について学び、参加者は様々なアクティビティを通して、タイの音楽とダンスの要素を体験しました。
	プログラム閉会式

参加者数

日本の初等中等教育に携わる教職員計15名

参加資格

(1) 日本国籍を有すること。
(2) プログラムの全日程に参加が可能であること。
(3) タイとの教育交流に関心を持ち、プログラム期間中の活動に積極的に参加できること。
(4)Web 会議システムを利用したオンライン形式でのプログラムに対応可能であること。

評価と報告

事業への参加後に、アンケート調査への協力依頼がなされた。

通訳

プログラム期間中は、タイ語⇔日本語の通訳が提供される。

参加者リスト

	氏名	所属先	担当教科
1	奥田 麻衣子	知夫里島教育委員会	ふるさと教育
2	目次 祐子	品川エトワール女子高等学校	外国語科(英語)
3	小田 歩	大阪府立渋谷高等学校	社会科(世界史・現代社会)
4	伊藤 英夫	荒川区立第三峡田小学校	学校経営
5	森 裕紀子	千葉県立桜が丘特別支援学校	全教科
6	吉井 玲香	海士町立海士中学校	美術
7	山田 雄司	軽井沢風越学園	外国語(英語)
8	槙田 亨	愛知県立刈谷北高等学校	地歴公民(世界史)
9	松野 至	名古屋経済大学市邨高等学校	社会科(公民)
10	佐々木 もも	横浜市立元街小学校	国際教室
11	渡邉 雅子	四国中央市立寒川小学校	
12	加藤 博美	伊那市立西箕輪中学校	美術、特別支援教育
13	波多野 公恵	新潟県立津南中等教育学校	数学
14	佐藤 賢一	仙台市立富沢小学校	全教科
15	広井 真理子	春日井市立西部中学校	理科

実施内容

オンラインでは二回目の実施となる今年度のタイ政府日本教職員招へいプログラムは、タイのアート、伝統文化教育に焦点をあてた三日間のワークショップという形で実施されました。

日タイの教職員間交流において、タイで行われている伝統文化教育は日本側参加者の大きな関心事の一つとなっていましたが、「アート」が交流プログラムの中心的なテーマとなったのは、8年間続く日タイ教職員交流のなかでも初めてのことでした。日本全国から集まった15名の参加者は、三日間のプログラムを通して歴史美術や工芸、音楽、舞踊など様々な側面からタイの文化を体験し、それらが「伝統文化教育」として学校教育の中でどのように実施されているのかを学んでいきました。各日程の講師はチュラロンコン大学および大学附属の教育機関で教鞭をとっている教師がつとめ、子どもたちの作品や学びの様子も写真や動画を通して紹介されました。

すべてのワークショップにおいては講義と実践がセットになっており、たとえば二日目に「子どもの発達のためのアート」というテーマで行われたワークショップでは、伝統音楽を聴きながら自由に手を動かして線や絵を描くといった試みを行いました。それぞれに描いた作品をPadletなどのプラットフォームを通して共有しあう時間もあり、頭と心と体を使ってタイのアートとふれあう時間となりました。

参加者の声

・Zoomという媒体を介してのプログラムでしたが、この様な形でも十分に他国と繋がり学ぶことが出るのだとわかりました。芸術と文化を通して国際的に繋がるというテーマの元、タイ国の文化を学んで日本の羽織のデザインに生かすワークショップや子どもの幸せな成長につながる芸術活動という内容に強く惹かれてぜひ参加したいと思いました。幸いに参加することができ、とても面白く、あっという間に時間が過ぎた感じがしました。

・とても素敵な時間になりました。日頃、全く接点のなかった国の方と画面越しであっても交流できることは大切だと感じました。なぜなら、相手側を身近に感じられることから、もっと知ってみたいと思えたからです。「教えることを仕事にする者」として、リカレントの一貫にもなると感じました。

タイ教職員招へいプログラム

背景

日本とタイとの間の国際交流事業としては、2015年より「タイ教職員招へいプログラム」が文部科学省、タイ王国教育省（MoE）の協力のもとで始まりました。第8回となる今年度は、2022年秋冬にタイの初等中等教育教職員15名をオンラインで招へいし、交流プログラムを実施しました。
本プログラムでは、タイ教職員が本邦の教育制度、教育事情について理解を深めるとともに、対話交流を通じて参加教職員が主体的なチェンジメーカーとして変容していく端緒を開き、ひいては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をめざしています。

目的

「出会い、対話、変容」をテーマに掲げ、次の（1）～（5）をねらいとしました。
（1）タイ教職員が日本の教育制度、教育事情について理解を深めること
（2）タイ教職員が自らのコンフォートゾーンを飛び出し、「他者」と出会い、日本（異なる環境・文化・人）に触れること
（3）タイと日本教職員が対話し、さまざまな価値観や考え方に触れ、相互理解や友好を促進すること
（4）参加者自身の教育実践等を振り返り、気づきや学びを共有し、行動へつなげること
（5）プログラムに関わるタイ日双方の参加者のネットワークを構築すること

吉田敦彦氏（大阪公立大学大学院 教授）をプログラムアドバイザーに迎え実施しました。

活動内容

オンラインのウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行いました。
・タイ教職員が日本の教育制度等の講義を受講する
・タイ教職員が日本の学校を訪問する
・タイ教職員が日本の生徒に授業し交流する
・タイ教職員が日本教職員と対話し、交流する（ワークショップ）
・参加教職員がリフレクション（振り返り、問い直し）を通じてビジョンを共有する

日程

日程	活動
11月26日（土）	**開会** **文部科学省のあいさつ** 大臣官房国際課国際協力企画室長　出口夏子氏 **タイ教育省のあいさつ** 国際協力局 局長　スプラニー・カムユアン氏 **ACCUのあいさつ** 国際教育交流部 部長　進藤由美 **ACCUオリエンテーション** 関係者の紹介 ・プログラムアドバイザー： 大阪公立大学大学院 教授　吉田敦彦氏 ・協力校： 奈良県立国際高等学校 校長　中尾雪路氏 ・ゲストスピーカー4名： ① 学校法人湘南学園 学園長　住田昌治氏 ② 横浜市立大岡小学校 学年主任　飯干望氏 ③ 学校法人自由学園 女子部中等科・高等科教諭 高野慎太郎氏 ④ 奈良県立国際高等学校 グローバル探究主任 松本真紀氏 講義：「日本の初等中等教育の概要」 文部科学省初等中等教育局 初等中等教育企画課 国際企画調整室 室長補佐　佐藤尚子氏 参加者とのアクティビティ （タイの先生の自己紹介セッション）
学校における国際交流	
11月30日（水）	タイ教職員による日本の学校訪問 （奈良県立国際高等学校）
12月9日（金）	タイ教職員による日本の生徒（高校生）への授業 テーマ：「持続可能な社会を目指すタイの先生や学校の取組」

日程	活動
12月9日 （金）	① みんなでつくる笑顔のコミュニティ ② いのちの輝きを未来に伝える ③ 蒼い地球を未来につなぐ ④ 未知の知恵を未来へ届ける ⑤ グローバルが生み出す力 ⑥ みんなちがうからみんなで支え合う （奈良県立国際高等学校）
対話交流　※ 公募による日本教職員も参加	
12月19日 （月）	**タイ日教職員の対話交流「わたしのESD」①** 前半：アイスブレイク 後半：ゲストスピーカー 住田昌治氏 （学校法人湘南学園 学園長） キーワード：ケアではぐくむ・学校を元気にするESD、カラフルな学校、学校経営
12月23日 （金）	**タイ日教職員の対話交流「わたしのESD」②** ゲストスピーカー 飯干望氏 （横浜市立大岡小学校 学年主任） キーワード：学校と地域をつなぐESD、地域発展、リラックスヨガ
12月26日 （月）	**タイ日教職員の対話交流「わたしのESD」③** ゲストスピーカー 高野慎太郎氏 （学校法人 自由学園 女子部中等科・高等科 教諭） キーワード：中動態、創発、生成変化、性の多様性
2023年 1月9日 （月・祝）	**タイ日教職員の対話交流「わたしのESD」④** ゲストスピーカー 松本真紀氏 （奈良県立国際高等学校 グローバル探究主任） キーワード：自分の本気を授業にする、人・地域・世界とのつながり
1月20日 （金）	リフレクション・ビジョン共有など閉会式
2-3月	アンケートや活動報告

参加者数

（1）タイの初等中等教職員15名

※うち5名は、2015年から2019年に日本を訪問した参加者です。
※タイ教育省職員はオブザーバー参加とし、上記の参加者数には含みません。

（2）日本の初等中等教職員10名（公募による）

参加資格

【タイ・日本教職員に共通する参加条件】
（1）初等中等教育に携わる教職員で、日本またはタイとの交流に意欲的な者
（2）ESD（Education for Sustainable Development）/SDGsに関心がある、または実践している者
（3）オンライン交流に必要な機材を用意でき、十分なインターネット環境があり、
パソコンやアプリケーションの操作ができる者
（4）プログラムの全日程に積極的に参加できる者
（5）自らの気づきや学びを活かせる教育現場を有すること

【タイの参加者について】
（1）タイの国籍を有する者
（2）過去に日本を訪問した5名の参加者については、プログラム期間中に自らの経験や国際交流の意義を波及させる意思があること

【日本の参加者について】
日本の国籍を有する者

評価と報告

タイの参加者はACCU の用意する評価票（アンケート票）に入力し、タイ教育部の担当者がとりまとめ、ACCU に提出した。

通訳

プログラム期間中は、原則として日本語⇔タイ語の逐次通訳が手配され、日本語の動画にはタイ語字幕がつけられた。

参加者リスト

タイの先生

	氏名	所属先	担当教科
1	Sirada Kaeoparakam	Nongrua Wittaya School	英語
2	Boonlue Sangsom	Nonsiwitthaya school	英語
3	Sirinoot Suvarnakuta	Saipanya School Under the Royal Patronage of her Majesty the Queen	日本語
4	Kanjana Madsari	Chumchonwatkhampeang School	英語
5	Wararat Sangsuk	Debsirinromklao School	数学

	氏名	所属先	担当教科
6	Darakan Charoenchitt	Benjamarachalai School Under the Royal Patronage of His Majesty the King	日本語
7	Piyarat Wimantong	Watsamorsuwannaram school	タイ語
8	Khwanchanok Sripalatham	Yothinburana school	日本語
9	Yuttana Muangsanam	Watlinthong (Jomwisitrachbumroong)	理科
10	Netchanok Wiwat	Latplakhaophitthayakhom School	物理
11 (2015)	Sasitorn Sangsatan	Kaengkhoi School	日本語・英語
12 (2015)	Tidarak Molek	Srinagarindra The Princess Mother School Kanchanaburi	日本語
13 (2018)	Tuannur Akman Semmad	Ban Khokmao School	理科
14 (2018)	Suksawat Preeyachot	Preeyachot School	数学
15 (2019)	Adisorn Nettip	Bankadwittayakhom School	社会科

日本の先生

	氏名	所属先	担当教科
1	山口 三依子	千葉市立加曽利中学校	特別支援英語
2	高橋 晋一	埼玉県立越谷北高等学校	英語
3	鈴木 茉莉	慶應義塾幼稚舎	英語
4	花田 好浩	日本体育大学柏高等学校	英語
5	水野 睦子	日野市立東光寺小学校	小学校全科
6	河野 大樹	大分県立大分上野丘高等学校	地歴公民科
7	髙野 龍之介	有明小学校	小学校全科
8	松野 至	名古屋経済大学市邨高等学校	社会科公民
9	久原 巳季	愛知県立瑞陵高等学校	理科（化学）
10	加藤 豊裕	一宮市立萩原小学校	外国語（英語）

実施内容

今年度は「出会い　対話　変容」のテーマで、15名のタイの先生を招へいして実施しました。プログラムを「学校における国際交流」と「対話交流『わたしのESD』」、2つの柱で組み立てました。

「学校における国際交流」では、タイの先生が奈良県立国際高等学校を2回オンライン訪問しました。訪問前にタイの先生には、学校紹介VTRを視聴していただき、1回目のリアルタイム交流では、当該校の先生や生徒によって準備されたさまざまな企画を通じて、日本の学校や文化に触れました。交流の中で、タイの先生から生徒に「フィールドワークが好きですか。またフィールドワークからどのようなことを学びましたか」という質問がありました。一人の生徒から「フィールドワークが好きです。学校内で気づけなかったことに気づき、またいろいろな知識を得ることができ、視野が広がり探求が進めやすくなるためです」という発言があり、学校から開かれた学びを感じさせるやりとりがありました。このような学びは当該校の特徴の一つでもあります。初日に文部科学省職員より示された日本の教育の具体を知る機会になりました。

2回目はタイの先生が高校2年生に授業をしました。当該校で2年生が学んでいる6つのゼミのテーマに分かれ、タイの先生がタイでの取組などを話しました。タイの先生2-3名ずつ6グループに分かれ、各グループが約30名の高校生に授業する形式です。オンライン授業のため、生徒さんの様子やクラスの雰囲気を断片的にしか感じ取ることができない環境の中でしたが、タイでは経験することがない、日本の学校での授業にチャレンジしました。ゼミの1つ「みんなちがうからみんなで支え合う」では、タイの学校におけるLGBTQや性的志向に関する取組が紹介されました。通訳の兼ね合いがあったかもしれませんが、質疑応答で日本の生徒とタイの先生が噛み合わない状況がありました。一般的に、タイではLGBTQに対する考え方や社会的な包摂性といった点で日本よりも成熟しているイメージがあります。しかしながら、タイにおいても宗教的、文化的にインクルーシブな環境が社会のあらゆる面で整っている状況でもなさそうなことが分かりました。タイの先生の授業は、交流校の生徒や先生にとって、現地の人と交流し、生の情報と一般的なイメージを照らして考える貴重な学びの場にもなりました。

「対話交流『わたしのESD』」ではタイの先生15名と公募による日本の先生10名が4回にわたって交流しました。この対話交流では、ESDとは何か、ESDとはこうあるべき、といった情報を差し出すことを目的にせず、各回に招かれたゲストスピーカーのライフヒストリー、問い、構えを切り口に、参加者がそれぞれの考えや視点を言葉でやりとりし、自分の教育実践や「先生」としてのあり方を深めていく機会にしました。互いのエピソードやストーリーを語り合うことで、それぞれの文化的背景や置かれた状況を垣間見、感じながら相互理解を進めていくことに主眼を置きました。タイの先生3名、日本の先生2名の組み合わせで小グループを5つつくり、グループ構成を変えずに進めました。ゲストスピーカーと参加者との質疑応答では、明日の実践に役立つ情報をつかむための投げかけや事実の交換を中心としながらも、取組に至るきっかけ、児童の変容、実践後の成果の見取りといった、本質に迫る問いかけも含まれていました。

タイの先生と日本の先生は目まぐるしい毎日を過ごす中で、自分の世界を飛び出す経験をしました。プログラムでの「出会い」、そして「出会い」からの「変容」にも今後注目

していきます。今回のプログラムでは参加者がそれぞれの「ことば」を投げ合い、相手と向き合う時間を日々設けました。すぐに「わかる」ことを求めるのではなく、「わからなさ」を抱えながら、自らに問い、考え、周りと対話し、関係を更新しながら、他者理解（相互理解）と友好を図ることがこのプログラムの核でした。

参加者の声

このプログラムで得られた学び・視点・問いはご自身にとってどんな意味がありましたか？という質問に対するタイと日本の参加者の回答よりランダムに6つ抽出しています。

・プログラム中に投げかけられた多くの問いには考えさせることがあり、大変意義がありました。タイと日本の先生との交流を通して得られた視点は多種多様で、考え方にはかなりの違いがありました。

・プログラム参加によって、自身の生徒に対する学習プロセスを振り返り、継続的かつ持続的なものにしようと考える機会を得ることが出来ました。

・自分が日頃行い、慣れ切ってしまっていることについて、本当にしっかりとできているのだろうか、またはやりたくはないが責任だからやっているだけなのか、あるいは教職者の精神をもって倫理観に基づいてしっかりと伝授できているか、視点を新しく変える必要はないか等に関心を持つようになった。子供たちが変わっていくのを見ることに全ての意味があり、そのために私達がまず変わらなければならない。

・この出会いを通して、もっと多くのことを自分自身も勉強して視野を広く、自分のため、人のためになるような活動をしていきたいと思いました。

・住田先生のご機嫌でいること、対話をすることにほぼ費やしている、ということが心に響きました。校長が変わると学校が変わると言われるくらい、影響があります。意識をして、ご機嫌で、対話をする校長を目指します。

・自分が変わらなければ、環境、教育が変わらないということです。

以下6つの質問に対する奈良県立国際高等学校の先生の回答から、各質問項目につきランダムに1つ抽出しています。

Q. 今回のタイ教職員のオンライン訪問（11月30日、12月9日）について、全体的なご感想をお書き下さい。印象に残った具体的な事例や発言内容等についても含めていただければ幸いです。

A. ６つのテーマ毎に授業をしていただいたいという大変な依頼にもかかわらずタイの先生方は、熱心に準備をいただき、どのゼミでも生徒たちは興味をもって取り組むことができました。

Q. 今回のタイ教職員とのオンライン交流によって生徒さんが何か得られたものはありましたか。また、それはどのようなものか具体的に教えてください。
A. オンラインという形のため、お互いに伝わりづらい場面もありましたが、少しでもこのような形で交流ができるのは、とても良い刺激になりました。次回は是非とも対面でタイの先生方にお会いしたいです。

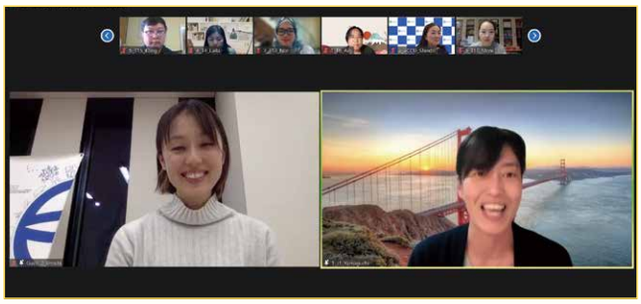
Q. 今回のタイ教職員とのオンライン交流によって先生方や学校として何か得られたものはありましたか。また、それはどのようなものか具体的にお答えください。
A.「出会い」を得ることができました。これからつながっていけるかは、今回の取り組みだけでは難しいところがあるかもしれません。かかわってもらった本校教員のモチベーションやひらめき、そしてタイの先生が希望されたか気になります。

Q. タイ教職員との交流のための準備や計画、実施にあたり、苦労した点や困難だったことについて教えてください。
A. オンラインという形で書道パフォーマンスの躍動感や臨場感をどう伝えるかに苦心しました。

Q. 今後の国際交流プログラムの内容として、加えると良いと思われる活動がありましたらご提案下さい。
A. タイの皆さんに書道パフォーマンスを見ていただいた際、オンライン上の反応はうかがえましたが、実際の感想を聞く場面があれば良かったと思います。

Q. 今後の教職員国際交流プログラムの改善に向けてご助言等がございましたら、お書き下さい。
A. ホスト校のメリットとして、ホスト校の先生方の学びにもご協力いただきたいです。

ESD ของฉัน
わたしのESD



ยินดีต้อนรับ
歓迎
未来の為に
僕たちは
旅の途中で
出会う

第４章

インドとの交流

India

インド教職員招へいプログラム

背景

日本とインドとの間の国際交流事業としては、2016年より「インド教職員招へいプログラム」が文部科学省、インド連邦政府教育省（MoE）、インド環境教育センター（CEE）の協力のもとで始まりました。
第7回となる今年度は、2022年11月6（日）から27日（日）までの期間、複数回にわたってインドと日本の受け入れ校および公募により集まった各15名、計30名の日印の初等中等教育に携わる教職員同士のオンライン交流を実施しました。

目的

本プログラムの目的は、未来を担う子どもたちを育む教職員同士の交流を通して、日印の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が主体的なチェンジメーカーとして変容していく端緒を開くことです。プログラム活動を通して、出会いや協働を楽しみながら、多様性への理解と尊重を育み、それを次世代へ受け継ぐことを通じて、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指します。

活動内容

ウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行う。
・動画視聴による日本およびインドの学校視察
・日本およびインドの教育制度ついての講義受講
・日印教職員間の意見交換、交流会
・日印の児童生徒対象のワークショップ

日程

日付	日程	活動
11月6日（日）	第1日	・開会式 ・プログラムオリエンテーション ・日本およびインドの教育制度に関する講義 ・参加者の自己紹介、意見交換等 ・文化体験（日本）
映像視聴期間①		
11月17日（木）	第2日	教職員交流会（映像に基づく意見交換・交流会）
映像視聴期間②		
11月21日（月）	第3日	日印の児童生徒対象ワークショップ
11月22日（火）	第4日	教職員交流会（映像に基づく意見交換・交流会）
11月27日（日）	第5日	・報告会 ・閉会式 ・文化体験（インド）

参加者数

インドの初等中等教職員15名（MoE職員およびCEEの職員1～2名を除く）
日本の初等中等教職員15名
※ 各受入校より最大3名の参加者を含む

参加資格

（1）日本語または英語での会話が可能であること
（2）自身でオンライン交流に必要な機材を用意し、操作ができること（パソコンが望ましい）
（3）プログラムの全日程に意欲をもって参加が可能であること
（4）将来にわたって、国際交流を通じた相互理解の推進、平和で持続可能な社会の実現
に寄与する意欲があること

〈 インド側参加者に限る 〉
（1）インドの初等中等教育またはノンフォーマル教育センターの教職員（教育行政官及び教育専門家を含む）であること
（2）インド国籍を有すること

〈 日本側参加者に限る 〉
(1) 日本の初等中等教育の教職員（教育行政官及び教育専門家を含む）であること
(2) 日本国籍を有すること

評価と報告

参加者はアンケート票を提出する。

通訳

日本語の動画には英語字幕が、英語の動画には日本語字幕がつけられ、意見交換会および交流会は日本語と英語間の逐次通訳が手配された。

参加者リスト

インドの先生

	氏名	所属先	担当教科
1	Motiur Rahman	Holy Cross School	Physics
2	Arun Kumar	Jawahar Navodaya Vidyalaya Kinnaur	Biology
3	Ashish Kumar Pathak	Kendriya Vidyalaya Gomtinagar	English
4	Rani Chahar	Upper Primary School Balhera Composite	English and Environment
5	Mussarrat Fatima	Upper Primary School, Bhanpur, Hasanganj	English, Mathematics, Environmental Science and Science
6	Vaibhav Awasthy	Bajaj Public School	Science
7	Kinjal Doshi	Universal High School	English
8	Shirin Madhuri Kommagiri	Pallavi Model School	English
9	Kusum Lata	Little Flower Public School	English
10	Meenakshi Khushu	Shree Vasishtha Vidhyalaya	Science
11	Sirisha Kummara	Delhi Public School, Nacharam	Biology
12	Meenakshi Narayana Iyer	The Indian Public School	Math, English, Unit of Interest
13	Sital Patro	Bal Bharati Public School	Science
14	Nisha Choudhary	St. Anselms Pink City School	Science and Environment Science
15	Nishita Bhimsaria	CEE's Planet Discovery Centre	Environment and Language
Observer	Renuka Rawat	ASN School	

日本の先生

	氏名	所属先	担当教科
1	松本 太郎	兵庫県立兵庫高等学校	英語
2	熊澤 ほづみ	静岡聖光学院中学校・高等学校	国語
3	米原 光章	古賀竟成館高等学校	保健体育
4	赤木 綾香	鳥取県立境港総合技術高等学校	英語
5	福島 巧大	筑後市立古川小学校	小学校全科
6	森 裕紀子	千葉県立桜が丘特別支援学校	全教科、保健体育
7	河原 忍	福岡県立福岡高等視覚特別支援学校	理療、英語
8	石川 幸子	栃木市立真名子小学校	小学校全科
9	田島 晃輝	白石市立小原中学校	数学
10	藤田 雅士	白石市立小原中学校	保健体育
11	菊地 健一	白石市立白石中学校	外国語
12	大宮 葉子	白石市立白石中学校	英語
13	北﨑 大地	白石市立白石中学校	数学
14	渡辺 魁	江南市立布袋中学校	国語
15	宮本 達章	和歌山市立貴志中学校	数学

実施内容

本年度のインド教職員招へいプログラムは「学校外に広がるネットワーク、地域同士が繋がるネットワーク、共同財産としての教育・文化多様性」を全体テーマとして掲げ、5日間の交流を行いました。

四か国との交流プログラムの中でも新しく、比較的小規模で実施されており、かつ日本教職員の派遣プログラムがないインドとの交流においては、パンデミック前から「日本教職員との1Day交流会」を重要な構成要素と位置付けていました。今回は、日本教職員の参加日程を増やし、お互いの教育事情を知り、対話する機会を複数回にわたって設けることにより、多様なバックグラウンドを持った日印の教職員にとって新しい発見と出会いを得ることをねらいました。

プログラム活動においては、日印でそれぞれ二校の「受入れ校」に協力を得て、実際の学校の様子が分かるような動画を事前に撮影し、動画に基づいて意見交換を行うセッションを持ちました。リアルタイムの学校訪問とは異なる形態で、受入れ校以外の学校に所属する教職員も意見交換に参加する新たな試みとなりました。

また、今回はもう一つの新しい試みとして、日印双方の参加者が所属する学校の児童生徒が一緒に参加できるワークショップを実施しました。ワークショップでは、前年度プログラムの日本側参加者であった小川亮氏をファシリテーターに迎え、ファシリテーター自身の取り組む「海岸清掃から海の問題を解決する活動」にて集めたシーグラスを用いた万華鏡づくりも行われました。インドの先生からは「農村地域の子どもたちにとって普段体験できないような活動をさせてあげられたことが嬉しい」との声があがり、さらに日印の児童生徒同士も短い時間ながらも交流することができました。

全日程を通して、日印それぞれの多様さに触れ、また異なる文化の中にある共通点を発見する機会となりました。

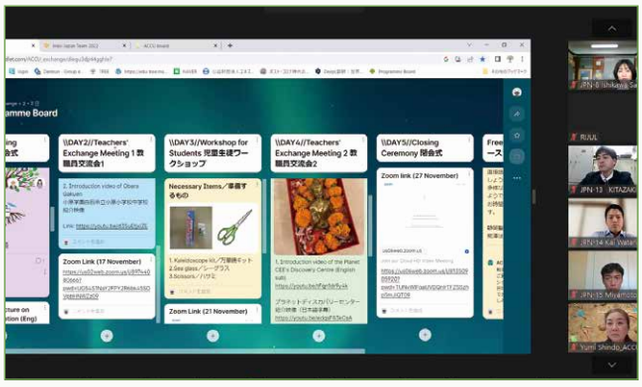
参加者の声

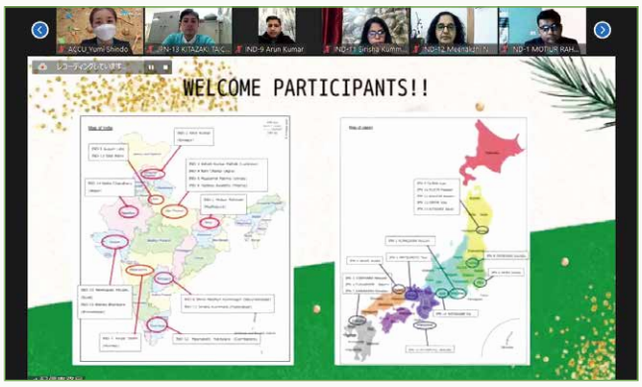
・日本の受入れ校で、持続可能な開発を達成するために実施しているp4c (philosophy for children)の取り組みや地域との連携についてのアイデアを交換する活動が最も印象に残りました。（インド側参加者）

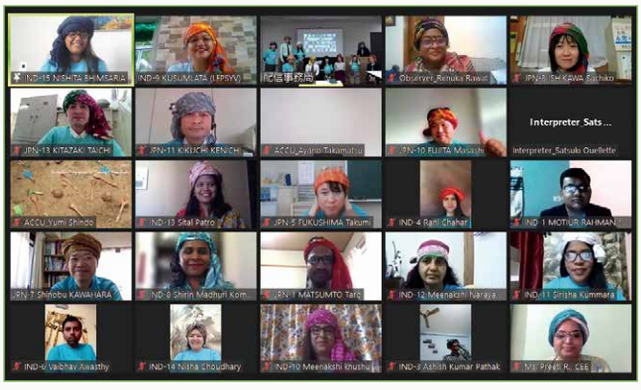
・言葉を超えた経験になりました。教師として多くのことを学び、非常に刺激的な経験をしました。また、日本についても多くのことを知ることができました。（インド側参加者）

・休憩時間ではありましたが、児童生徒が現地の生徒に向けて話しかけている場面がありました。プログラムの本来の目的とは外れてしまいますが、そのような交流の機会があると生徒にとってはかけがえのない経験になるのではないかと思いました。（日本側参加者）

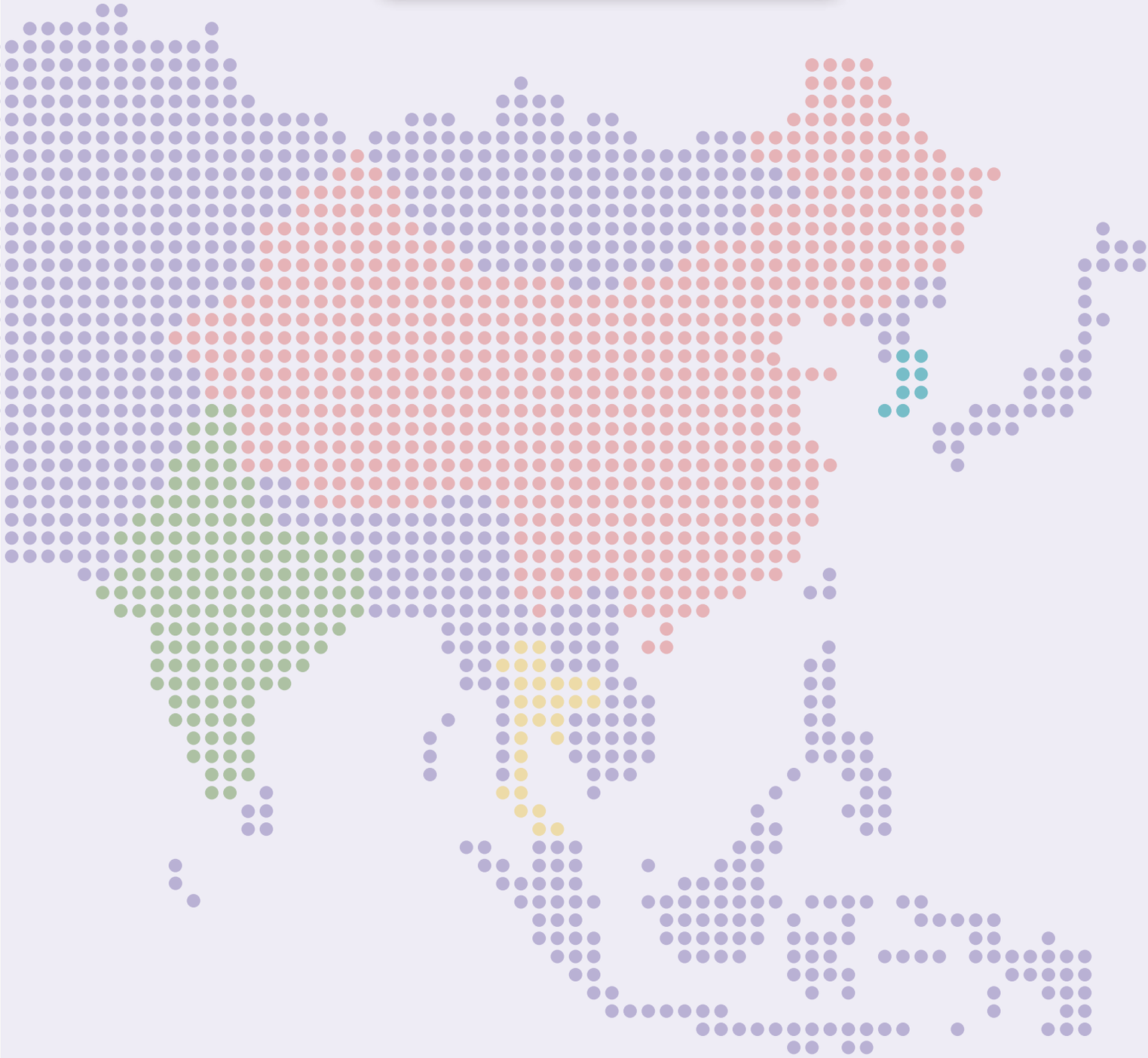
・海外の先生だけではなく、日本の県外の先生とも交流ができ、自分の考えの視野を大きく広げることができた。（日本側参加者）

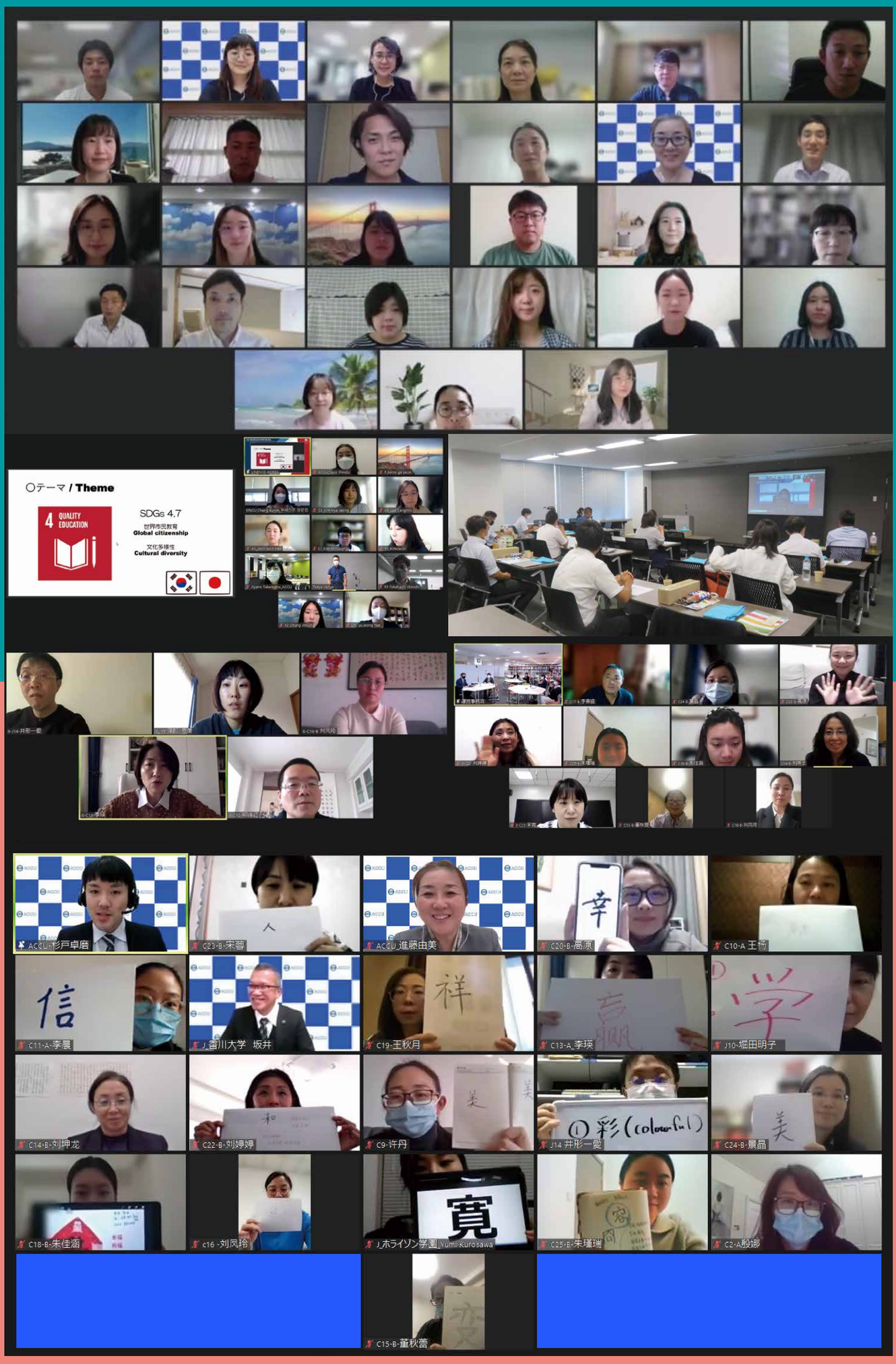






付録




○テーマ / Theme
4 QUALITY EDUCATION
SDGs 4.7
世界市民教育
Global citizenship
文化多様性
Cultural diversity
ACCU-杉戸卓磨
C23-B-宋蓉
ACCU 進藤由美
C20-B-高琪
C10-A 王杨
C11-A-李晨
J.香川大学 坂井
C19-王秋月
C13-A_李瑛
J10-堀田明子
C14-B-刘坤龙
C22-B-刘婷婷
C9-许丹
J14 井形一愛
C24-B-景晶
C18-B-朱佳涵
c16 -刘凤玲
J.ホライゾン学園 Yumi Kurosawa
C25-B-朱瑾瑞
C2-A殷娜
C15-B-董秋蕾

配信事務局
1_T11_Janjao
4_J5_Mizuno
4_T14_Peach
2_T2_Tiger
2_J10_Kato
3_T8_Khwan
4_J2_Takahashi
2_T12_Khao
4_T4_Laila
1_J1_Yamaguchi
5_T15_Kong
1_T6_Aey
Guest 2_Iihoshi
Guest 1_Sumita
5_J9_Kuhara
3_Guest 4_Matsumoto
2_ACCU_Ito
1_J8_Matsuno
3_ACCU_Shindo

02
แรงบันดาลใจ
จากพุทธศาสนา
ACCU

IND-11 Sirisha K...

SDGs Spiral
Akira Ogawa (NPO SDGs Spir...
Ayano Takamatsu_ACCU
JPN-9 生徒 : Obara junior high
Kogakyouseikan.H.S
JPN-2 KUMAZAWA Hozumi
Yoko Omiya
IND-10 Meenakshi Khushu
JPN-13 KITAZAKI Taichi
IND-1 Motiur Rahman (Rahman Si...
Seiichiro Sato
IND-11 Sirisha Kummara
JPN-2 Jun Ueda
IND-8 PMS ALWAL
IND2- Arun Kumar
IND-9 Kusum Lata
ACCU_Yumi Shindo
JPN-14 WATANABE Kai
Lui Otsuka
IND-5 Mussarrat Fatima
IND-14 Nisha Choudhary
IND 8 - Shirin Madhuri
JPN-7 KAWAHARA Shinobu
IND-4 Rani Chahar
JPN-5 Takumi Fukushima
IND-11 Students : DPS NACHARA...

令和４年度プログラム協力機関・協力者

● 韓国教職員招へいプログラム

《対面》

日本ESD学会 評議員／元 伊豆市立天城中学校 校長　大塚 明
静岡大学地域創造教育センター 准教授　山本 隆太
株式会社STORY 地形画像診断事業部・技術士　鈴木 雄介

《オンライン》

八千代市立大和田南小学校 校長　田中 佳子
静岡大学地域創造教育センター 准教授　山本 隆太
元 東京学芸大学 教授　成田 喜一郎
和歌山県立古佐田丘中学校 校長　井筒 正文
玉川大学 教授　小林 亮

● 中国教職員招へいプログラム

香川大学教育学部 特別支援教育領域 教授　坂井 聡
ホライゾン学園仙台小学校 校長　歩久 バリッシュ
AICJ中学高等学校 校長　David Cooper

● タイ教職員招へいプログラム

大阪公立大学大学院 教授　吉田 敦彦
奈良県立国際高等学校 校長　中尾 雪路
学校法人湘南学園 学園長　住田 昌治
横浜市立大岡小学校 学年主任　飯干 望
学校法人自由学園女子部中等科・高等科 教諭　高野 慎太郎
奈良県立国際高等学校 グローバル探究主任　松本 真紀

● インド教職員招へいプログラム

白石ユネスコ協会 理事　海藤 節生
日本舞踊直派若柳流 常任理事　若柳 梅京
白石市立白石中学校 校長　樋口 英明
白石市立小原小中学校 校長　武田 義弘
NPO法人 SDGs Spiral 理事長　小川 亮

プログラム関連機関

● 文部科学省

文部科学省 大臣官房国際課長　北山 浩士
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室長　出口 夏子
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室
人物交流専門官　小野 憲一
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室
人物交流係員　野内 瑛里

● 海外パートナー機関

・韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）
・中国教育部
・中国教育国際交流協会
・タイ教育省
・インド教育省
・国際NGOインド環境教育センター（CEE）

● 海外協力機関

・駐日本国大韓民国大使館
・中華人民共和国駐日本国大使館 教育処
・タイ王国大使館学生部
・在日インド大使館

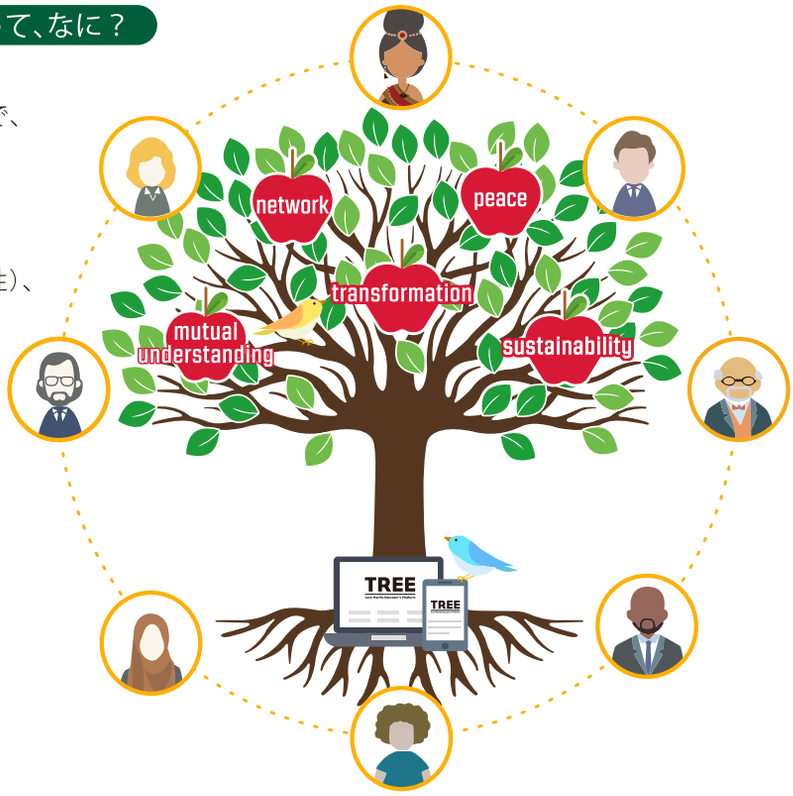
事業実施運営機関

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7F
Tel: 03-5577-2853　Fax: 03-5577-2854
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL: http://www.accu.or.jp

理事長
　田村 哲夫
国際教育交流部長
　進藤 由美
国際教育交流部主任
　高松 彩乃
国際教育交流部プログラムスペシャリスト
　伊藤 妙恵
国際教育交流部プログラムオフィサー
　杉戸 卓磨
国際教育交流部プロジェクトスタッフ
　蓮見 詩保子

“Asia-Pacific Educators’ Platform: TREE” って、なに？

TREEは、教職員国際交流事業に参加・協力した国内外の教職員がつながるための会員制SNSで、2020年に日本語版・英語版の本格運用がスタートしました。
Transformative learning（変容する学び）、Respect for diversity（多様性への理解と寛容性）、Exploration（探究）、Exchanges（交流）の頭文字をとってTREEと名づけられました。



TREE に参加する

① 会員登録の申請を行う

こちらから会員登録ページにつながります
（PC・スマートフォンどちらも可）

② 管理者による本人確認（3営業日以内）

③ 登録完了メールを受信

教職員国際交流の冊子「TREE of International Exchange - 対話から未来をつむぐ -」

本事業の成果と参加者の声を現場の方々の手に届きやすい形でまとめました。プログラムに参加したことのある方も、ない方も、国際交流の場そのものや、そこに集まってきた先生方の声を感じて、「自分も参加してみたい」と思っていただけたなら幸いです。

（第1章）先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場
・・・国際交流の「場」の紹介
（第2章）対話ではぐくむ ・・・ 先生方の対談と寄稿
（第3章 ）教職員国際交流のコロナ禍の今

文部科学省委託 令和４年度　新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業実施報告書

2023 年 3 月
編集・発行
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　03-5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　https://www.accu.or.jp
デザイン・印刷・製本
design service 株式会社
ⓒ 2023　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

MEXT
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN